

ニーチェにおけるニヒリズムと人間形成

小野塚 正 樹

ニーチェのニヒリズムは、特に心理的側面において、人間形成の問題としてとらえることが可能である。これは、ニヒリズムの時代を生きるわれわれ人間のあり方や生き方について、実践の問題、すなわち生きるという行為そのものの問題として扱われる。最も極端なニヒリズムにおいて無が永遠回帰するとしても、それをおよそ到達しうる限り最高の肯定として能動的に受け止め、絶えざる自己超克によって常に新たな価値創造を実践する生を生き抜くことにより、人間は本来の自己へと形成されていくという人間形成観が、ニーチェのニヒリズム思想から見いだされる。価値ニヒリズムを肯定し、新たな価値を創造し続けることで生を生き抜くという新たな人間形成観を定立したニーチェは、その理論的主張にとどまらず、各人の生において実践することを求めた、現実的かつ実践的な思想をわれわれに贈与したのである。

キーワード：ニーチェ ニヒリズム 人間形成 自己超克 価値創造

1. 問題の所在

ドイツの哲学者F. W. ニーチェ (Nietzsche, Friedrich Wilhelm, 1844-1900) によれば、われわれが生きているこの時代はニヒリズムが到来した時代である。ニーチェが予言したのは「ヨーロッパのニヒリズム」であるが、現代社会の様々な場面においてニヒリズムが語られる現状を鑑みると、ニヒリズムはもはやヨーロッパにとどまらず、世界全体を覆っている思想であり、教育もその例外ではない⁽¹⁾。

さて、ニーチェの思想を教育の視点から考察した研究は、バーゼル大学における公開講演「われわれの教養施設の将来について」や、『反時代的考察』に含まれている「教育者としてのショーペンハウアー」を主なテキストとした、初期ニーチェの教育論や教師論、Bildungという言葉に示される教養観や人間形成観、そしてこれらから導出される自己形成思想を解明する研究が中心であったといえる⁽²⁾。その一方で、ニーチェにおけるニヒリズム思想は、多くの論者が指摘しているとおり、「超人 der Übermensch」、「永遠回帰 die ewige Wiederkehr」、「力への意志 der Wille zur Macht」などといった、後期ニーチェの主要概念に通底する極めて重要な概念であるにもかかわらず⁽³⁾、そ

の内に秘められている人間形成思想を明らかにする研究はほとんどなされていない状況にある。

ところで、ボルノー (Bollnow, Otto Friedrich, 1903-1991) は、『実存哲学と教育学』の序論において、教育学の歴史には「機械的 (手細工的) 教育概念 mechanische (handwerkliche) Vorstellung」と「有機的教育概念 organische Vorstellung」という二つの根本的な見解がたえず繰り返し現れていると指摘する⁽⁴⁾。前者の教育観は、手細工人が、前もって抱いている計画にしたがって、前もって与えられている材料をつかって、適当な道具を用いて品物をつくり出すように、教育者もまた、自己の心に浮かぶ目標に向かって、自己にゆだねられた人間を一定の仕方形成する、すなわち「つくる」という見方である。これに対して、後者の教育観は、植物がその種子にやどる素質を発達させるように、人間もまた内部から自己のうちにそなわっている可能性を、自己自身のうちに設定された目標に向かって発展させるという見方である。これらの教育観には両者とも、陶冶性概念、すなわち連続的な発展や漸次的な改造によって人間を教育することができるという前提が成立している。しかし、これらの前提を実存哲学は否定するとボルノーが述べるように、先行研究によって示されたニーチェの人間形成観は、ボルノーが示す連続性に基づいた二つの教育観のいずれかに収斂するものとは考えにくい。われわれの生の実践的課題としてとらえたニーチェのニヒリズム思想を人間形成の観点から考察することは、後期ニーチェの人間形成論を解明する鍵となるだけでなく、既存の教育観に新たな知見をもたらすものとも考える。

このような問題意識から、私は本稿において、無意味や無価値が永遠に続くこの現実世界において新たな価値を定立し続けることで自己を超克し、本来の自己へと形成されていくという、後期ニーチェ哲学の核心であるニヒリズム思想の考察をとおして見いだされるニーチェの人間形成思想について明らかにすることを目的とする。そして、本稿で提示する人間形成観は、初期ニーチェにおいて示されている自己形成・自己超克思想はニヒリズム思想の探究によって核心に迫ることができること、また非連続性に立脚した教育観という、新たな人間形成観を示唆することにもなると思われる。

論述は以下のように展開される。最初に、ニーチェのニヒリズム思想の中心である「最高の諸価値の無価値化」について、遺稿を中心に人間形成の視点から再構成し、ニーチェがニヒリズム到来の原因としてあげている論理的側面と心理的側面について検討する。その際、ニーチェのニヒリズムは、特に心理的側面において、人間形成の問題としてとらえることが可能であり、具体的にはニヒリズムの時代を生きるわれわれ人間のあり方や生き方について、実践の問題、すなわち生きるという行為そのものの問題として扱われることを示す (2節)。以上の議論をより具体的に深めるために、『反キリスト者』に見られるニーチェのイエス像、および『ツァラトゥストラ』においてニーチェが提示した「超人」について批判的に検討することで、ニーチェが描こうとした人間のあるべき生き方、すなわち生の実践のあり方について考察する (3節)。最後に、ニーチェのニヒリズム思想に潜む人間形成観を結論として提示する (4節)。議論を進めていく際に、ニーチェのニヒリズムについて「力への意志」との関連性を重視して解釈しているハイデガー (Heidegger, Martin, 1889-1976)、同じく「永遠回帰」との関連性を重視して解釈しているレーヴィット (Löwith, Karl, 1897-1973)、お

よびニーチェを教育者としても論じているヤスパース (Jaspers, Karl, 1883-1969) の諸論を参照することで、ニヒリズム思想の解明に努めるとともに、その思想の奥底にある人間形成観を照射するための導きとする。

2. ニヒリズムの論理と心理

ニーチェのニヒリズムに関する記述の多くは遺稿に記されている。こうした事情から、本稿においてもニーチェのニヒリズムについてテキストを抽出する際、晩年の遺稿から精選することになる。この点についてハイデガーは、ニーチェのニヒリズムに関する遺稿を精選するための基準として、(1)もっとも冴えた明晰さともっとも鋭い洞察の時期、すなわち1887年と1888年に書かれたもの、(2)可能な限りニヒリズムの本質的核心を含み、それを十分に展開してすべての本質的観点からわれわれに提示するもの、(3)ニーチェのニヒリズム思想との対決を適切な地盤の上にのせるのにふさわしいもの、という三つの基準を条件として提示しているが⁵⁾、本稿で取り上げるニーチェの遺稿についても、この三条件を充たすもの、あるいはこの基準に準ずると判断したものを考察の対象とする。

ニーチェはニヒリズムについて、「最高の諸価値が無価値になるということ。目標が欠けている。『なにゆえか』という問いへの答えが欠けているのである」(KSA12, 9[35], S.350.)と定義づけている。端的に述べられている「最高の諸価値」についてニーチェは、「キリスト教的=道徳的な解釈にこそニヒリズムが潜んでいる」(KSA12, 2[127], S.125.)という箇所からも明らかのように、ヨーロッパにおいてはキリスト教およびキリスト教がもたらす道徳に最高の諸価値が存在していると考えられていたこと、そしてその内に潜んでいるニヒリズムが顕在化し、無価値化されたことを示している。このニヒリズムは、「われわれの大いなる諸価値や諸理想が終わりまで考えぬかれた論理」であり、論理であるからこそニヒリズムの到来は必然的であるとする (KSA13, 11[411]4, S.190.)。

このようなニーチェによるニヒリズムの定義は、無神論に対する叱責の言葉として西洋哲学史において最初に見られたニヒリズムとは異なるし⁶⁾、ニーチェと同時代にロシアの文豪によって示された創造なき破壊でもない⁷⁾。ましてやロシアの時の皇帝アレクサンドル2世の暗殺(1881)に象徴されるようなテロリズムでもない。ニーチェの説くニヒリズムは価値ニヒリズムとも呼びうるものである⁸⁾。キリスト教およびその道徳によって価値づけられていた諸価値が無価値になるというニーチェの価値ニヒリズムは、すでに多くの研究者によって論じられている。例えば、レーヴィットによれば、ニーチェのニヒリズムは『華やぐ知恵』125節によって初めて語られた「神の死」に由来するものであるとされ⁹⁾、このキリスト教の神は、ほとんど二千年もの間、人間と世界の意味や目的となっていたので、その死の第一の結果として、世界と人間には意味や目的がないということを意味する「ニヒリズム」が生じるとされる¹⁰⁾。そして、神によって認可されていたキリスト教的道徳価値——われわれの現存在解釈と現存在評価の全体系を規定しているもろもろの価値——に対する信仰の喪失が、ニヒリズム出現の究極動因であるととらえられている¹¹⁾。さらに、ニーチェにとってニヒリズムは、「われわれの従来からのキリスト教道徳の価値の究極まで考えられた論理」であることから、われわれの最高の価値がすべて失われることは必然であること、そしてこの必然性はキリスト教道徳に

とってかわる新たな価値を定立する必要性をもたらすことを示していると解釈される¹²⁾。

また、ハイデガーは、ニヒリズムとは至る所でひとつの歴史であり、この歴史の中では、「諸価値」、「諸価値の査定」、「諸価値の価値喪失」、「諸価値の価値転換」、「諸価値の新しい定立」が問題となり、最終的には、すなわち本来的には、一切の価値定立の原理を別様に評価しつつ定立することが問題となる、と解釈している¹³⁾。それゆえに、ニヒリズムは、最高の諸価値が無価値化していく過程の内的法則であり、最高の諸価値の崩落が価値の本質に応じて進行する過程の「論理」である¹⁴⁾。これらの解釈から、ニヒリズム到来の必然性が「論理」として語られるとともに、ニヒリズムにおいて問題となる「価値」とは何であり、その「価値」が、どのような「論理」により「無価値化」されるか、その「無価値化」されたニヒリズムの中でいかなる「価値」を構築していくかが問題となる。

ニーチェのニヒリズムにおいて考えられる価値について、ハイデガーは「生が『生』であるための条件」であると位置づけ¹⁵⁾、従来の諸価値が無価値化していくことは「生」の条件が崩壊することを意味すると述べている。ところで、ニーチェによれば、ニヒリズムには精神の高揚した力の徴候としての「能動的ニヒリズム activer Nihilism」と、精神の力の下降および後退としての、すなわち弱さの徴候である「受動的ニヒリズム passive Nihilism」という両義性が存在する (KSA12, 9 [35], S.350-351.)。ニーチェによれば、能動的ニヒリズムは精神の高揚した力の徴候として理解されるが、力の極大に達するのは暴力的な破壊の力としてであり、おのれのために生産的に一つの目標を立てるほど十分な強さを持たない (*Ibid.*)。しかし、「生」の条件の崩壊であるニヒリズムを、「すべての価値からの解放」ととらえ¹⁶⁾、諸価値を転換し、新たな価値を創造することが求められる。

それでは、ニヒリズムを能動的に生き抜くために求められる諸価値の転換、そしてこの転換によって導出される新たな価値の必要性や創造は、人間形成においてどのような意味を持つだろうか。ニーチェは、価値を転換する力を人間が獲得することは、最も強力な訓育手段であったキリスト教的道徳的解釈の威力低下を可能にすると述べている (KSA12, 5 [71]3, S.212.)。またハイデガーは、この「従来の諸価値の転換」について、「従来の価値定立の変化と新しい価値要求の『育成 Züchtung』である」と述べている¹⁷⁾。このことは、諸価値が無価値化される歴史的必然性の中で、新しい価値要求の育成にとどまらず、ニヒリズムを能動的に生きるための生き方、すなわち、ニヒリズムを能動的に生き抜くための人間を形成することを示唆しているように思われる。ニーチェのニヒリズムは、歴史的必然性をもってわれわれを襲うとともに、われわれ一人ひとりがニヒリズムと正対し、従来の諸価値の転換や新たな価値を創造する「生」を生きることを求めているのであり、その「生き方」を現実の生に求めるところに、ニヒリズムにおいて人間形成が重要な問題として浮かび上がってくるのである。

さて、ニーチェは諸価値の無価値化というニヒリズムの必然的到來を主張したが、「われわれはこのニヒリズムをまず体験しなければならない」 (KSA13, 11 [411]4, S.190.) とも述べている。つまり、われわれが生を生きる上でニヒリズムの「体験 erleben」は不可避であり、また、われわれが「生きる」という行為そのものに直接関係することから、ニヒリズムは自分の生を生きるという実践の問題としてもとらえられる。ニーチェがニヒリズムについて語るとき、彼は「論理」と「心理」とい

う言葉を対にして用いているが¹⁸⁾、今後はニーチェの「心理」という語に焦点を当て、その用法について検討しながら、ニヒリズムの心理的要因と人間形成との連関について考察していく。

ニーチェによれば、ニヒリズムが到来する心理的要因は三段階によって示される。ニーチェは『『生成しつつあるもの』『現象的なもの』が唯一の存在のあり方』と考えているが(KSA12, 7[1], S.249)、第一に、一切の出来事に意味や目標を探し求めても、そうしたものは何もなく、達成されるものは何もないことがわかるという、生成の目的に対する幻滅である。第二に、一切の出来事に全体性や体系化を定立し、讃嘆したり崇拜したりしても、これら全体性や体系化が存在しないことが判明するという、一元論への信仰根拠の消滅である。この二つを経て、第三の、最後の形態が現れるとする。ニーチェによれば、変化し移ろう世界を生成の世界と位置づけ、これを唯一の現実として把握したが、この生成の世界全体を迷妄とし、生成の彼岸にある世界が真の世界であるとでっちあげることである。ニーチェはこの最後の形態のニヒリズムについて次のように述べる。「心理学的状態としてのニヒリズムはさらに最後の第三の形態をとる。生成で目ざされているものは何もないということ、また、個人が最高の価値をもつ元素のなかにひたりきるように、そのなかにすっかり沈潜することができるような大いなる統一性が生成を支えていることなどないということ、このふたつの洞察がすでに与えられているならば、逃げ道として残っているのは、この生成の世界全体に迷妄と判決を下し、生成の世界の彼岸にある世界を真の世界としてでっちあげることである」(KSA13, 11[99]1, S.46-48)。

この遺稿で考察主題として挙げられている「心理的状态」における「心理」とは、ハイデガーによれば、ニーチェ当時の生理学と結びついた自然科学的＝実験的な心的事象ではない。それは、人間の本質を哲学的に問う「人間学」を超えた、「心的なもの」への問いであり¹⁹⁾、ニヒリズムを「心理的状态」として把握することは、ニヒリズムが存在者全体のただ中における人間の境涯に関わるものであること、人間が存在者たる限りの存在者への関係に自ら立ち入り、この間柄とひいては自分自身を形成し主張する有様に関わるものであること、歴史的に生起しつつ存在するものであることを意味している²⁰⁾。ここでハイデガーが述べている「人間の境涯に関わること」「存在者への関係に自ら立ち入ること」「自分自身を形成すること」は、すでに述べたニヒリズムの実践性、すなわち、われわれ一人ひとりがニヒリズムと正対し、従来の諸価値の転換や新たな価値を創造する「生」を生きることを具体化した内容であると考えられる。したがって、生成の目的に対する幻滅や、一元論への信仰根拠の消滅という「体験」とおして導出される最後の心理的状态、すなわち「彼岸の世界を真の世界としてでっちあげる」という価値の転倒行為がなされる心理的状态の克服こそが、最後の形態のニヒリズムにおける人間形成の実践的課題であると考えられる。

3. 人間像に見られる生

ニヒリズムの克服はわれわれの生の実践的課題であり、ニヒリズム思想に潜む人間形成観を解明する上においても重要なテーマであることが示されたが、この課題を現実の生の課題として対峙するために、ニーチェが提出した人間像の典型を具体的に検討することで、目ざされる人間像や人間

形成のあり方を考察する。というのは、「人間とは何であるかという問いは、人間はいかなるものとして、また何のために自分自身を生産 hervorbringen することができ、また生産することを欲するかという問いに関係する」とヤスパースが述べるように²⁰⁾、人間観と人間形成観は緊密な関係にあるからであり、またニーチェ自身具体的な人間像を提出することによって、人間の生について探究しているからである。

ニーチェは人間像を考察する際、その生き方を具体的に示すことで生のあり方を明らかにしようとしているが、その一つの例としてイエス (Jesus von Nasareth) をあげることができる。ニーチェは、最後の形態のニヒリズムに見られる価値の転倒行為は、キリスト教によってもたらされたと理解し、キリスト教を徹底的に批判した。ニーチェによるキリスト教批判は、キリスト教道徳から人間が解放されることを企図したものであるとともに、その批判をとおして、われわれが生きる現実世界において新たな価値を創造する生を生きることを示唆したものである。しかし、ここで注意すべきは、ニーチェの批判するキリスト教は伝道者パウロ (Paulus) 以降によって成立したキリスト教であり²¹⁾、イエスの行為については高く評価する記述も多く見られるという点である。ニーチェはイエスの言動をリアルに詳述しているが、キリスト教が歴史的に成立する以前のイエスの行為すなわち実践に、人間としてあるべき姿、すなわち生の実践者としてのモデルを提示しているようにも思われる。また、具体的な人間像を提示したものとして「超人」があげられる。『ツァラトゥストラ』において初めて提示された「超人」は、「神の死」の民衆への告知と同時に説かれていること (KSA4, Z1, Vorrede3, S.14.)、およびニーチェ自身超人を「最高に出来の良い人間という一つのタイプ Typus」(KSA6, EH, Warum ich so gute Bücher schreibe1, S.300.) と説明していることを鑑みると、神の死によってもたらされたニヒリズムを生きる上で、ニーチェ自身が説いた人間像として重要であることは言うまでもない。ニーチェが示したイエスの実践ならびに超人の生き方は、ニヒリズムが蔓延している現代を生きる人間の形成にどのような意味を持つであろうか。

(1) イエス像に見られる生の実践

「キリスト教の実践は空想をもてあそぶことではない」(KSA13, 11 [365], S.162.) とニーチェが遺稿で記しているように、ニーチェにとってキリスト教とは、信仰ではなく実践を本旨とする宗教であった。そして、その実践を言説や行動によって体現したのがイエスであったとニーチェは理解していたのである。「ニーチェの行ったイエスの生活方法の性格描写は、同時に人間のあり方の一般的な一つの可能性を示すのが目的である」とヤスパースは述べているが²²⁾、『反キリスト者』が書かれたのが、ニーチェがニヒリズムについて思索を深めた「もっとも冴えた明晰さともっとも鋭い洞察の時期」と合致することを鑑みると、人間のあり方の一般的な一つの可能性」は、ニヒリズムを能動的にとらえ、新たな価値を創造する人間の条件にほかならないと考えることもできよう。

さて、ニーチェにとってイエスとは、「彼が生きたごとく、彼が教えたごとく、死んだ」人であり、「人間を救う」ためにではなく、いかに生きるべきかを示すために生きた人であったと理解される (KSA6, AC35, S.207.)。ニーチェはイエスの行為について詳細に記述している。「裁判官に対する、

捕吏に対する、告訴人とすべての種類の誹謗や嘲笑に対する彼の態度、——十字架上で彼の態度である。彼は反抗せず、おのれの権利を弁護せず、非道から身をまもる処置を何らとることもなく、それどころか、彼はそれをそそのかす……そして彼は、彼に悪をくわえるものたちとともに、この者たちのうちで、祈り、苦しみ、愛する……防禦せず、立腹せず、責任を負わず……そうではなくて悪人にも反抗せず、——悪人を愛する人であった(KSA6, AC35, S.207-208.)。このようにイエスは、教えを説くだけでなく、その通りに「実践 Praktik」を行った稀有な人物であり、「実践」の重要性や価値を人類に残した人物であった。そして、このイエスは「十字架で死んだ」のであり、彼の「福音」もまた「十字架で死んだ」とニーチェは考える。イエスが残した「福音」とは「実践」であって「信仰」ではないからである。「単にキリスト教的実践のみが、十字架で死んだその人が生き抜いたと同じ生のみが、キリスト教的」なのであって、このような「真正のキリスト教、根源的キリスト教」の生の実践は、今日のわれわれにも可能であり、必然的ですからあると考える。ニーチェはイエスの言動について深い共感を覚えるとともに、今日の生の実践における指針を示し、イエスの言動を自らも実践することで理想的な人間に至ることができると考えているようにも思われる。

しかし、最後の形態のニヒリズムに陥っている現代においては、イエスの行ったとおりに行えばニヒリズムが克服できるとは考えにくい。ヤスパースは、こうしたニーチェのイエス像について、驚嘆を禁じ得ずも、ニーチェの理解しているイエスが「歴史的な実在と言えるか」、「やはり心理的に見てそもそもあり得べきものと言えるか」という疑問を投げかけている²⁴⁾。最初の疑問点については、確かに、『反キリスト者』に見られるニーチェのイエス像について、実在したイエスとは異なると主張する論者もいる²⁵⁾。しかし、現在のわれわれの考察では、ニーチェが理解したイエス像の中に、彼岸の世界に価値をでっちあげることなく、われわれが生きる現実世界においてニヒリズムを能動的に生き抜くことのできる人間形成思想を見いだすことができるかどうか論点であるため、ニーチェのイエス像の正当性については立ち入らないことにする。人間形成論の立場から問題にすべきは第二の疑問である。確かに、このような生の実践は、ニーチェの言うように「現在でも可能」であるかもしれない。しかし、イエスの行為は、「反抗せず」「弁護せず」などといった、行為の否定に終始する。これらの消極的行為は、ニヒリズムにおいて求められる能動性と合致しない。つまり、ニーチェの理解したところによれば、イエスの生の実践は「受動的ニヒリズム」の体現であり、「デカダンス」の域を出ないと考えられる²⁶⁾。

(2) 「超人」としての生

ニーチェが「超人」という新たな人間像を提示したのは『ツァラトゥストラ』序説においてであった。ツァラトゥストラは、「神の死」に基づいて、「超人」という人類が目ざすべき人間像を民衆に向かって説く。ニーチェは「神の死」という、ややもすれば形而上学的議論に回収されそうな内容よりも、「超人」というわれわれの生き方そのものに関わる内容を民衆に対して説いていることは、現実重視の一端を示すものと考えられる。ニーチェによれば「超人」とは「大地の意義 der Sinn der Erde」である(KSA4, Z1, Vorrede3, S.14.)。地上を超えた、すなわち彼岸の世界における希望を説

く者たちは、「自らそれを承知しているにせよ、いないにせよ、毒を盛る輩」であるゆえに、かれらは「生の軽蔑者 Verächter des Lebens」(*Ibid.*, S.15.)である。この「生の軽蔑者」から大地すなわちわれわれが生きるこの現実世界に生の意義を取り戻し、「超人」を目ざすことが求められる。

ニーチェの超人思想についてごく簡潔に整理したが、上述したように、超人思想は、神の死と不可分な関係にある。ニーチェがまだ自分の思想としてニヒリズムという語を用いる前、ニーチェはキリスト教およびその道德の終焉を「神は死んだ」というフレーズで表現した。超人思想の人間形成論的考察を進めていく上で神の死に論究することは、ニヒリズム思想との連関も見られることから有益であると思われる。

ニーチェが「神の死」を初めて著作において示したのは、『華やぐ知恵』(1882) 125節「狂気の人間」においてであるが、「神の死」の内実について多くの研究者がこのアフォリズムを取り上げ、論究している。例えば、ハイデガーは『ニーチェの言葉「神は死せり」』の中でこの125節を取り上げ、神の死における神とはキリスト教の神であること、この神とはニーチェの思索にとっては超感性的世界一般の呼称として用いられており、超感性的世界は形而上学的世界であるから、プラトン以来の超感性的世界は影響力を失っていることを意味すると解釈している²⁷⁾。また、ヤスパースは『ニーチェ』において、「神は死んだ」という言葉の中でも「死んだ」という動詞に着目する。存在しないというのではなく、また信じないというのでもない。死んだという言葉を使うことによって、現在の現実の状態を明確にさせようとする。そして、「神は死んだ」という言葉は、この世における安心の一切の根底を根こそぎにしてしまうととも、何もかも抗することのできない実存的な誠実さを要求しているものととらえられる²⁸⁾。この「神の死」というテーゼは、「神の死」そのものの理解もさることながら、「神の死」という現実を了解した上で成立するニヒリズム思想や超人思想、永遠回帰、力への意志といった、後期ニーチェ哲学の源泉であるということもできる。

またニーチェは同じ『華やぐ知恵』第五書(1887)の最初のアフォリズム343節において、「神は死んだ」という出来事について述べている。「われわれの快活さの意味するもの——近代の最大の出来事——『神は死んだ』ということ、キリスト教の神への信仰が力を失ったこと、——これはすでにその最初の暗影をヨーロッパに投げ始めている」(KSA3, FW343, S.573.)、「実際われわれ哲学者であり、『自由なる精神』であるものは、『古い神は死んだ』という知らせによって、新しい曙光を浴びたかのような思いがしている。われわれの心には感謝・驚嘆・予感・期待が溢れる。——ついに視界はふたたび自由となったようだ——まだすっきりは明るくないとしても——。ついにわれわれの船はふたたび出発——あらゆる危険を冒して出発することができる。認識者があえて行なう一切の冒険がふたたび許された。海、われわれの海がふたたびひらかれた。おそらくいまだかつて、このような『自由な海』は存在しなかつただろう」(*Ibid.*, S.574.)。ここでは、近代最大の出来事である神の死によって人間がキリスト教の信仰から解放され、自由なる精神を発揮できることを肯定的に描写している。

以上の考察をまとめると、神の死という現実を引き受け、この現実世界に新たな価値を創造する超人としての生を民衆に求めたことが、ニーチェの眼目であったことがわかる。そしてツァラトゥ

ストラが求めるのは、ただ単に神の死と超人思想を民衆が理解することにとどまらない。「わたしに倣って、飛び去った徳を大地へと連れ戻すのだ——そうだ、肉体へと連れ戻すのだ。その徳が、大地に大地の意義を、人間による意義をもたらすようにと！」(KSA4, Z1, Von der schenkenden Tugend2, S.100.)と語るように、ツァラトゥストラが超人としての生を生きているようにわれわれも生きること、すなわち超人としての生を実践することを説く。この超人としての生を生きるとは、ツァラトゥストラの教説や振る舞いを尊敬し、信じることではない。自らがツァラトゥストラを乗り越えられるほど自己を超克することによって、本来の自己を見いだすことをツァラトゥストラは命令する。「君たちは言うのか、ツァラトゥストラを信じている、と？ だが、ツァラトゥストラに何程の意味があるろう！ 君たちはわたしの信奉者だ。だが、およそ信奉者などに何程の意味があるろう！ 君たちは、いまだ君たち自身を探し求めはしなかった。その前に、たまたまわたしを見つけたのだ。信奉者たちというのは、いつもそうだ。だから信などは、およそ取るに足りないのだ。今わたしは、君たちにこう命令する。わたしを捨て、君たち自身を見つけよ、と。君たちすべてが、このわたしを知らないと言ったとき、そのときはじめて、わたしは君たちの許に帰って来よう」(KSA4, Z1, Von der schenkenden Tugend3, S.101-102.)。このように、「神は死んだ」という現実に基づいてツァラトゥストラが贈与しようとする徳は、厳しい自己超克を含む超人思想であり、この思想を各人の生において実践していかなければならない。

自己超克は、超人や永遠帰郷とならんで、『ツァラトゥストラ』全体を流れるテーマの一つである。ツァラトゥストラは民衆に、すべての存在はおのれ自身を乗り越えるなにものかを創造してきたことから、「人間は超克されるべきなにものかである Der Mensch ist Etwas, das überwunden werden soll.」と説くことにより、人間の自己超克の必要性を指摘する(KSA4, Z1, Vorrede3, S.14.)。創造者とは「人間の目標を創造し、大地にその意義と未来を与える者。この者がはじめて、何かが悪であり、善であるということ創造する」(KSA4, Z3, Von alten und neuen Tafeln2, S.247.)という説明とあわせて考えれば、超人としての生は「常におのれ自身を克服しなければならぬ」(KSA4, Z2, Von der Selbst-Ueberwindung, S.148.)創造者としての生であると考えられる。

以上の議論から、ニーチェの超人思想を人間形成の立場からとらえた場合、否定行為に終始するイエスと異なり、神が死に、キリスト教的諸価値が無価値化された中で、人間を「超克されるべきなにものか」ととらえ、新たな価値を創造していくことで自己を超克する超人としての生を求めているように考えられる。この生は、彼岸の世界を真の世界と捏造するような価値の転倒行為を行うことなく、無価値化された現実世界をありのままに受け入れ、自己を超克していく生であると考えられる。超人を人間の理想像とする立場はニーチェ研究において顕著である。例えばハイデガーは、「『人類』ではなく、超人が目標なのである！」というニーチェの遺稿(『力への意志』1001節)を引用しながら、「『超人』は超感性的な理想ではない。超人はまた、いつか名乗り出たり、どこかで現れでてくる個人でもない。超人は、完成した主観性の最高の主観として力への意志が純粋に力を発揮することである」と述べ²⁹⁾、人類が超人を意志することの必然性を説く。さらに、「超人への歩みは、従来人間を本質的に『逆転された者』へと変身せしめる。この逆転された者はまた、人間の一つの

『新たな型 neue Typus』を打ち立てるだけではない。むしろニヒリズム的に逆転された人間が、はじめて典型 Typus としての人間である」、「ニヒリズム的に逆転した人間という類型に自分を自覚的-意志的に鑄型することによってのみ、自分自身を意志することができるということを、要求するのである」と述べることで³⁰⁾、超人を「新たな型」と位置づけ、自己をこの新たな型にはめていこうと自覚し、意志することの重要性を指摘している。またヤスパースも、超人を「人間の本来の目標」と考え³¹⁾、「超人の姿なき無規定性は、決まった理想の中で私を没落させたり、萎縮させたりしない指導的像 Leitbilder のような働きをし、「超人は世界内におけるいろいろな企画によって行われる陶冶の理想となる」と述べている³²⁾。これらの議論から「超人」を「つくる」ために人間を陶冶し形成するというニーチェの人間形成論を導き出せるようにも思われる。

しかし、この点については、人間形成論の立場からは慎重に検討しなければならない。「形成 Bildung の学である教育哲学の分野で Übermensch を探求するには、変容的観点から見るのが適当である」という指摘は³³⁾、世界を生成ととらえ、それを唯一の現実としたニーチェの主張を鑑みるとき考慮しなければならないであろう。ツァラトゥストラは民衆に超人を教えた。しかし、次節において検討するように、ニヒリズム思想で語られる生成 Werden に着目するとき、超人という定まった生が存在するわけではなく、したがって人間を超人という鑄型にはめるという人間形成観も成立し得ないと考えられる。超人思想を人間形成の観点からとらえる場合、ニヒリズムによってもたらされる無制約性や無規定性が支配するこの現実世界において、超人は新たな価値を定立し、自己を超克していくことで本来の自己になっていくものと解釈されるべきである。

4. ニヒリズムに立脚した自己超克と人間形成

ニーチェのニヒリズム思想について人間形成の観点から考察してきたが、ニヒリズムとは、現実の世界を根底から支えている価値観や道徳を根底から覆す思想であり、それゆえにこの現実世界を生きるわれわれにとって、意味や価値が「無 nihil」に帰し、存在基盤や価値基準が崩壊するという、われわれの生き方に直結する思想である。また、諸価値が無価値化されるという価値ニヒリズムは、善や悪についての価値も無価値化され、善悪のない、「すべてが許されている」世界を強調する思想である。人間形成論の立場から考える上においても、ニヒリズムは教育や人間形成を営むための前提や根拠となる価値基準がないことを意味し、ニヒリズムの蔓延によって、われわれの現実世界はいっそう混迷を深めることに危惧を抱かせるものである。

とはいえ、ニーチェは人類を不安と絶望に陥れるためにニヒリズム思想を説いたわけではない。ニーチェにとって重要なことは、『華やぐ知恵』343節において神の死が新しい曙光ととらえられているように (KSA3, FW343, S.256.)、あるいは『道徳の系譜』第二論文24節において「反キリスト者、反ニヒリスト」を「神と虚無との克服者」と位置づけているように (KSA5, GM2-24, S.336.)、われわれ自身もたらしたニヒリズムにいかに対峙して新たな価値を創造していくのか、そしてその実践をとおして自己をいかに超克していくかという点にあったと考えられる。この実践的課題は、2節で述べた能動的ニヒリズム、すなわち、ニヒリズムを能動的にとらえ、強さの徴候としてそれを受

け入れることと呼応する。ここでニーチェがいう「強さ」「弱さ」とは、以下の引用が示すように「弱い者」「比較的強い者」「最も強い者」という三段階によって区別され、価値の無価値化という状態に陥ったときの態度の取り方を指していると理解される。「(1)弱い者はそうした状況のゆえに破滅する、(2)比較的強い者は破壊しないものを破壊する、(3)最も強い者は裁きを下す諸価値を超克する(überwinden)」(KSA12, 9[107], S.397.)。ニヒリズムに覆われている世界を生き抜くためには、能動的ニヒリズムによる「破壊の力」を転換させ、諸価値を超克する力を持つ「最も強い者」となることが期待される。

しかし、われわれはニヒリズム思想についてその根底まで考察しているとは言い難い。遺稿9[35]で記されている能動的ニヒリズムは「破壊の力」であることから、既存の諸価値を破壊した後でなされるべき新たな諸価値を定立するような創造力は持たないのであった。ニヒリズムを最高の諸価値の無価値化から新たな諸価値の創造へと転換していくためには、さらにニヒリズムを徹底させた「最も極端なニヒリズム」まで考察する必要がある。その際には、ニーチェはニヒリズムの最も極端な形態を、永遠回帰思想とあわせて告知していることを見逃してはならない。「生存はそのあるがままの形で見るなら、意味も目的もない。しかし必ず繰り返される、無という終局もない。『永遠回帰“die ewige Wiederkehr”』だ。これこそニヒリズムの最も極端な形態 die extremste Form des Nihilismus である。無(無意味)が永遠だというのだ! das Nichts (das “Sinnlose”) ewig!」(KSA12, 5[71]6, S.213.)とニーチェは記している。目標や価値が無に帰すのみならず、無や無意味が永遠に続くとの認識がニーチェにおけるニヒリズムの根底に存在する。ここで示されているニヒリズムの最も極端な形態と正対することによってこそ、ニーチェのニヒリズム思想の最深部に触れることになる。

ニーチェはニヒリズム思想をとおして、生成の世界の彼岸にある世界を真の世界であるとしたキリスト教道徳の虚構性を暴き、「生成の現実」を「唯一の現実」とするための価値転換を試みた。ところが、2節で示したように、生成には目的がなく、全体性が生成を支えていることもない。つまり生成によって世界が進歩し発展することはなく、生成自体にも目的はないゆえに、生成が唯一の現実であってもその現実に意味や価値は存在しないのである。さらに最も極端なニヒリズムに至っている現代では「無(無意味)」が永遠に回帰するのであり、無が永遠に回帰される生成の世界においては、無意味で無価値な人間の形成が永遠に繰り返されると考えざるをえない。

しかし、ニーチェはニヒリズムが最も極端な形態にまで進行したとしても、人間形成の可能性を捨てているとは考えられない。ニーチェはニヒリズムを否定的に語る一方で、「『ニヒリズム』は精神の最高[・]の力強[・]さが掲げる理想、このうえなく豊饒な生が掲げる理想」であるとも述べている(KSA12, 9[39], S.312.)。裁きを下す諸価値を超克するような「最も強い者」にとって、ニヒリズムに満たされた世界は、従来の価値にとらわれず新たな価値を創造することができるゆえに理想的な世界でもある。またニーチェは『反キリスト者』3節において、「私がここで提出する問題は、生物の発展系列の中で人類の次にこれに代わって現れるべきものはいかなるものか、ということではない(——人類は最終である——)。問題は、価値のより高い者、より生きるに値する者、未来をより

確保する者として、いかなるタイプの人間を育成 züchten すべきか、意欲すべきか、ということである」と述べているが(KSA6, AC3, S.170.)、この箇所では念頭に置かれている問題とは、『反キリスト者』全体のテーマであるキリスト教の虚構性のほかに、同様の記述の遺稿と照合させて考える場合、超人が含まれていると解釈すべきである⁹⁴⁾。この記述から、ニヒリズムの世紀とされる現代においても、『ツァラトゥストラ』で提示された超人を念頭に置きつつ、現実世界における人間形成について考えていたことがわかる。

このことは、超人もまた生成の中でとらえられなければならないことを意味する。1887年春頃に書かれたとされる遺稿の中で、「生成に存在の性格という刻印を押しこと——これこそ最高の力への意志なのである」「いっさいが回帰するというのは、生成の世界の存在の世界に対する極度の接近である。考察の頂点」と書かれたものがある(KSA12, 7[54], S.312.)。この遺稿と、永遠回帰について記されている前述の遺稿5[71]6とを組み合わせると、最も極端なニヒリズムでは唯一の現実である生成の世界に意味や目標は存在しないだけでなく永遠に繰り返されるが、力への意志によって新たな価値を定立し続け、自己超克を繰り返す生を生きることが求められると考えられる。この「新たな価値を定立し続けること」「自己超克を繰り返すこと」について、最も極端なニヒリズムでは無は永遠回帰するため、このニヒリズムは絶えずわれわれに襲いかかる。よって、新たな価値定立をもってニヒリズムを克服したとしても、それは暫定的な克服でしかない。そのため「ニヒリズムはその都度克服されなければならない」のである⁹⁵⁾。「たとえわたしが、何を創造しようとも、また創造したものを、どんなに愛しようとも——わたしはやがて、そのものを、そしてわたしの愛情をも敵に回さなければならぬ」(KSA4, Z2, Von der Selbst-Ueberwindung, S.148.)とツァラトゥストラは述べるように、新たな価値創造に対する永遠性は認められず、さらに新たな創造を求めざるをえないのである。

以上から、最も極端なニヒリズムにおいて無が永遠回帰するとしても、それを「およそ到達しうる限り最高の肯定」(KSA6, EH, Z1, S.335.)として能動的に受け止め、絶えざる自己超克によって常に新たな価値定立を実践する生を生き抜くことにより、人間は本来の自己へと形成されていくことが、ニーチェのニヒリズム思想から導き出される人間形成観であると考えられる⁹⁶⁾。ボルノーは『実存哲学と教育学』において、連続的な生活過程・教育過程を扱う伝統的かつ古典的な教育学に、非連続的な形式を扱う実存的な事象を取り入れることで、教育学に新たな地平を切り開くことができると考えた。ニヒリズムに立脚したニーチェの人間形成観は、機械的(手細工的)教育概念や有機的教育概念のように、陶冶による連続的な教育観と考えることはできない。また、ニーチェのニヒリズムをボルノーのいう「危機」と見なすとしても⁹⁷⁾、ボルノーが生哲学の立場から行ったように、ニヒリズムという非連続的な実存的な教育観をもって連続的な教育観をとらえ直すことをニーチェは提唱したわけでもない。最も極端なニヒリズムで見られる、無目的な生成の世界において無や無意味が永遠に回帰することにわれわれは幻滅し、この世界や生を否定するのではなく、ディオニュソス的な世界肯定として積極的にとらえることで諸価値を転換していかなければならない。それはすなわち、運命を愛するという世界や生をありのままにすべて肯定することをつうじて、本来の自己自身

へと形成していくことをニーチェは求めたといえる。このことについて、ニーチェは次のように記している。「私が身をもって生きているような実験哲学は、試みとして、原則的なニヒリズムの可能性を先取りする。といってもそれは否と言うことに、否定に、否への意志にとどまるということではない。むしろその正反対なものにまでつきぬけること——世界へのディオニュソスの肯定、あるいはがままの、割引きもせず、例外もつくり、選択もしない世界そのもののディオニュソスの肯定への到達を欲する、——それは永遠の循環、——同一の事物、多くの結び目の同一の論理と非論理を欲する。生存に対してディオニュソス的に立ち向かうこと、——これこそおよそ哲学者たる者の到達できる最高の状態である。それをあらわす私の公式が運命の愛である」(KSA13, 16 [32], S.492)。ニーチェはニヒリズムによってもたらされる非連続的な世界と生の現実を出発点とし、諸価値の転換という非連続的な行為によってニヒリズムを克服することを求め、それを自己自身が実践することで本来の自己になっていくことを説いたのである。

またここから、ニヒリズムという非連続性に立脚し、絶えざる価値創造という非連続的な実践によって自己を超克し続けていくことで本来の自己を自ら形成していくという、どこまでも非連続に基づいた人間形成観がニーチェのニヒリズム思想の奥底に潜んでいることが見いだされる。さらに、ニーチェのニヒリズム思想は最初の著作である『悲劇の誕生』から見られるという指摘⁸⁸⁾、ニーチェは人間が本来の自己になるという人間形成思想を初期の著作から探究し続けたことを踏まえた場合、従来研究されてきた初期ニーチェの人間形成論や自己形成思想についても、ニヒリズムに立脚した教育観や人間形成観に基づいて再構築することにより、ニーチェの人間形成論がより深いレベルにおいて解明されるものと考えられる。

価値ニヒリズムを肯定し、新たな価値を創造し続けることで生を生き抜くという新たな人間形成観を定立したニーチェは、その理論的主張にとどまらず、各人の生において実践することを求めた、現実的かつ実践的な思想をわれわれに贈与したのである。

【註】

- (1) 例えば、佐藤学は、「『何を学んでも無駄さ』『何を学ぼうと、どうせ人生は変わりはないし、社会は変わりっこない』というニヒリズム」が、学びから逃走している子どもたちの中に深く浸透していると述べている。佐藤学『「学び」から逃走する子どもたち』、23-24頁。
- (2) 例えば、高橋勝「F. W. ニーチェ——『自己教育』思想の開拓者——」(『現代に生きる教育思想5 ドイツ(Ⅱ)』所収、15-41頁)、宮澤知江美「ニーチェにおける言語と自己形成の問題」(『教育哲学研究』67号、86-99頁)、相澤伸幸『「ツァラトゥストラ」にみるニーチェの自己形成思想」(『教育哲学研究』78号、1-16頁)が挙げられる。
- (3) 例えば、レーヴィットは、ニーチェの本来の思想は、その初めに神の死が、その中間に神の死から生じたニヒリズムが、その終わりに永遠回帰をめざすニヒリズムの自己克服が位する一つの思想体系であると述べている(Löwith, *Von Hegel zu Nietzsche*, S.211。レーヴィット『ヘーゲルからニーチェへI』、259頁。)。また、ハイデガーは、ニーチェの思索における五つの主要名称として、「ニヒリズム」、「すべての従来の価値の転換」、「力への意志」、「同じものの永遠なる回帰」、「超人」を挙げているが、「ニヒリズム」の本質は、「すべての価値の転換」、「力への意志」、「同じものの永遠なる回帰」との連関において思索されなければならないと述べている(Heidegger, *Nietzsche II*,

- S.31-32. ハイデガー 『ニーチェ II』, 37-38頁。)
- (4) Bollnow, *Existenzphilosophie und Pädagogik*, S.16-18. (ボルノー 『実存哲学と教育学』, 20-23頁。)
 - (5) Heidegger, *Nietzsche II*, S.35. (ハイデガー 『ニーチェ II』, 40-41頁。)
 - (6) 哲学史におけるニヒリズムという語の用法は、ヤコービ (Jacobi, Friedrich Heinrich, 1743-1819) がフィヒテ (Fichte, Johann Gottlieb, 1762-1814) に宛てた書簡において、フィヒテの世界構成的自我は肯定的な理念や価値の解体をもたらすニヒリズムであると論じて、1799年に批判的に使用したのが最初であると考えられている。ニーチェ以前のニヒリズム研究において、1799年以前にもニヒリズムという語は使用されていたが、ニヒリズムという観念を発展させた貢献はヤコービにあると言われている。Gillespie, *Nihilism before Nietzsche*, p.65. を参照。
 - (7) ツルゲーネフ『父と子』(1862) では、ニヒリストとは「すべてのものを批判的見地から見る人間」であるとともに「いかなる権威の前にも屈しない人間」であり、それは「周りからどんなに尊敬されている原理でも、それをそのまま信条として受け入れることはしない」立場の人々を指している。「いかなる権威の前にも屈しない」ニヒリストにとって否定の対象となるものは、「何もかも」である。この「何もかも」はロシアの人々の精神基盤であるキリスト教を含む。このようなあらゆる否定は「すべてを破壊している」ことでもあり、これを「国民の多くがそれを要求している」から、ニヒリストは「その要求を実行しなくてはならない」のである。そしてその要求を遂行した後、つまりすべてを破壊した後に新たな「原理」を「建設する」ことは、「それはもう我々の仕事ではない」のであって、既存の権威や価値の徹底的破壊がニヒリストの使命として描かれている。『ロシア文学全集第3巻 ツルゲーネフ』, 19頁および43-44頁を参照。
 - (8) 「価値ニヒリズム」という語について、渋谷治美は「およそ人間をめぐる〈善と悪の区別立て〉による価値評価には、確実な根拠があるのかどうか、むしろ善悪の基準はそれ自体として存在しないのではないか」(下線部は原文のとおり)と表現している。関根清三編『死生観と生命倫理』, 65-66頁を参照。
 - (9) Löwith, *Gott, Mensch und Welt in der Metaphysik von Descartes bis zu Nietzsche*, S.156. (レーヴィット『神と人間と世界』, 151頁。)
 - (10) *Ibid.*, S.179. (『神と人間と世界』, 175頁。)
 - (11) Löwith, *Nietzsches Philosophie der ewigen Wiederkehr des Gleichen*, S.52. (レーヴィット『ニーチェの哲学』, 56頁。)
 - (12) レーヴィット『ヨーロッパのニヒリズム』, 67頁。
 - (13) Heidegger, *Nietzsches Wort* 《*Gott ist tot*》, S.226. (ハイデガー 「ニーチェの言葉『神は死せり』, 『杣径』所収, 253頁。)
 - (14) Heidegger, *Nietzsche II*, S.45. (ハイデガー 『ニーチェ II』, 51頁。)
 - (15) Heidegger, *Nietzsche I*, S.438-439. (ハイデガー 『ニーチェ I』, 423頁。)
 - (16) Heidegger, *Nietzsche II*, S.26. (ハイデガー 『ニーチェ II』, 32頁。)
 - (17) *Ibid.*, S.27. (『ニーチェ II』, 32頁。)
 - (18) 例えば、直前の引用である KSA13, 11 [411] 4. では、「……いつか未来にはあの完全なニヒリズムにとってかわるだろうが、論理的にも心理的にも、このニヒリズムを前提にしており、……」と記されている。
 - (19) Heidegger, *Nietzsche II*, S.50-51. (ハイデガー 『ニーチェ II』, 55-56頁。)
 - (20) *Ibid.*, S.52. (『ニーチェ II』, 57頁。)
 - (21) Jaspers, *Nietzsche*, S.125. (ヤスパース『ニーチェ (上)』, 224頁。) 傍点は原文では隔字体であることを示す。
 - (22) 『反キリスト者』における次のニーチェの記述は、イエスによる初代キリスト教とパウロ以降のキリスト教との相

- 異が明確になっている。「パウロは救世主をおのれの十字架にかけたのである。イエスの生涯、その実例、その教え、その死、全福音の意味と権利——この憎悪からの贗造家が、おのれの利用しうるものだけをとりえるや、もはや何一つとして残されてはいなかった。(中略)彼(パウロ、筆者註)はキリスト教の昨日を、一昨日を、あっさりと抹殺し、初代キリスト教の歴史を捏造した。」(KSA6, AC42, S.216.)
- 23 Jaspers, *Nietzsche und das Christentum*, S.21. (ヤスパース『ニーチェとキリスト教』, 29頁。)
- 24 *Ibid.*, S.21-23. (『ニーチェとキリスト教』, 31-35頁。)
- 25 例えば、八木誠一『イエスとニヒリズム』, 58-63頁を参照。
- 26 Jaspers, *Nietzsche und das Christentum*, S.20. (ヤスパース『ニーチェとキリスト教』, 31頁。)
- 27 Heidegger, *Nietzsches Wort* 《Gott ist tot》 in: Holzwege, S.214-218. (ハイデガー『ニーチェの言葉「神は死せり」』, 240-244頁。)
- 28 Jaspers, *Nietzsche*, S.246-248. (ヤスパース『ニーチェ(上)』, 423-424頁。)
- 29 Heidegger, *Nietzsche II*, S.273. (ハイデガー『ニーチェII』, 281頁。)
- 30 *Ibid.*, S.277. (ハイデガー『ニーチェII』, 285頁。) 傍点は原文は斜字体であることを示す。
- 31 Jaspers, *Nietzsche*, S.162. (ヤスパース『ニーチェ上』, 285頁。)
- 32 *Ibid.* (ヤスパース『ニーチェ(上)』285-286頁。)
- 33 相澤伸幸『「ツァラトゥストラ」にみるニーチェの自己形成思想』『教育哲学研究』第78号, 3頁。
- 34 遺稿11[413]では、「超人」というタイトルの後、ニーチェは「わたしの問いは、人間にとってかわるのはなにか、ということではない。どのような種類の人間を、より高い価値をもつものとして、選び、欲し、育成すべきか、ということである」と記している。(KSA13, 11[413], S.191。)
- 35 Jaspers, *Nietzsche*, S.433. (ヤスパース『ニーチェ(下)』, 326頁。)
- 36 ラマイカースは、ニーチェの特にすぐれた教育面における仕事を自己超克の終わりなき過程の中に見いだしている。Ramaekers, *Teaching to Lie and Obey: Nietzsche on Education*, in: *Journal of Philosophy of Education*, Vol.35, No.2, 2001, p.263. を参照。
- 37 ボルノーが『実存哲学と教育学』で取り上げている危機(とりわけ道徳的危機)と、ニーチェの主張するニヒリズムを近似した思想とみなしてよいかどうかといった反論があると思われる。これについては、ボルノーは道徳的危機について、「持ちこたえられなくなったふるい秩序から、これに解決をあたえるはずの決断に対する絶望という奈落へおちこむことによって、かえってあたらしい秩序へと達することになる」とも述べており、「創造的な営み」によって、世界を構成している秩序の崩壊の先にある新たな秩序の構築が説かれるのである(Bollnow, *Existenzphilosophie und Pädagogik*, S.34. ボルノー『実存哲学と教育学』, 50-51頁。)。ニーチェの説くニヒリズムも、実存哲学の観点からはニヒリズム到来によって実存の崩壊がもたらされたといえる。これらから、ボルノーが述べる道徳的危機とニーチェのニヒリズム思想との近似性が認められよう。
- 38 Reginster, *The Affirmation of Life: Nietzsche on Overcoming Nihilism*, p.51.

【参考文献】

(1) ニーチェの著作

ニーチェによる引用は、*Friedrich Nietzsche Sämtliche Werke*, Kritische Studienausgabe in 15 Bänden (K S A), Herausgegeben von Giorgio Colli und Mazzino Montinari, Walter de Gruyter, Deucher Taschenbuch Verlag, Neuausgabe, 1999. を使用した。ニーチェからの引用については、K S Aの巻数、著作を示す記号、節(数字によ

りがたい場合は題名によって表記)、ページの順で、引用箇所後に丸括弧の中で示した。なお、著作を示す記号は下記のとおりである。

『華やぐ智慧』……………FW (Die fröhliche Wissenschaft)

『ツァラトゥストラ』……………Z (Also sprach Zarathustra)

『道徳の系譜』……………GM (Zur Genealogie der Moral)

『反キリスト者』……………AC (Der Antichrist)

『この人を見よ』……………EH (Ecce Homo)

遺稿からの引用はK S Aの巻数、遺稿節号、ページによって示した。

引用に当たっては、白水社版『ニーチェ全集』のほか、ちくま学芸文庫版『ニーチェ全集』をも参考にした。ただし、訳語の統一などにより、引用箇所は必ずしも翻訳のままではない。

なお、引用中の傍点は、原文では隔字体であることを示す。隔字体以外の場合はその都度示す。

(2) ニーチェ以外の著作

註には原則として、著者、著作名、ページのみをあげた。本稿で使用した文献の詳細は以下のとおりである。

Bollnow, Otto Friedrich, *Existenzphilosophie und Pädagogik: Versuch über unstetige Formen der Erziehung*, Stuttgart, W. Kohlhammer, 1959. (ボルノー『実存哲学と教育学』, 峰島旭雄訳, 理想社, 1966.)

Gillespie, Michael Allen, *Nihilism before Nietzsche*, The University of Chicago Press, Chicago and London, 1995.

Heidegger, Martin, *Nietzsche*, Gesamtausgabe Bd.6-1,6-2, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 1961. (『ニーチェ I・II』, ハイデッガー全集第6-1, 6-2巻, 創文社, 2000, 2004. 所収)

Heidegger, Martin, *Nietzsches Wort 《Gott ist tot》*, in: Holzwege, Gesamtausgabe Bd.5, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 1977. (ハイデッガー「ニーチェの言葉『神は死せり』」, 『袖径』ハイデッガー全集第5巻, 創文社, 1988. 所収)

Jaspers, Karl, *Nietzsche: Einführung in das Verständnis seines Philosophierens*, Walter de Gruyter, Berlin, 1974. (ヤスパース『ニーチェ (上) (下)』, 草薙正夫訳, 理想社, 1966, 1967.)

Jaspers, Karl, *Nietzsche und das Christentum*, R.Piper & co. Verlag, München, 1952. (ヤスパース『ニーチェとキリスト教』, 橋本文夫訳, 理想社, 1965.)

レーヴィット『ヨーロッパのニヒリズム』, 柴田治三郎訳, 筑摩書房, 1974. (初出は『思想』第220-222号所収, 岩波書店, 1940.)

Löwith, Karl, *Gott, Mensch und Welt in der Metaphysik von Descartes bis zu Nietzsche*, Vandenhoeck & Ruprecht in Göttingen, Germany, 1967. (レーヴィット『神と人間と世界』, 柴田治三郎訳, 岩波書店, 1973.)

Löwith, Karl, *Nietzsches Philosophie der ewigen Wiederkehr des Gleichen*, Kohlhammer, Stuttgart, 1956. (レーヴィット『ニーチェの哲学』, 柴田治三郎訳, 岩波書店, 1960.)

Löwith, Karl, *Von Hegel zu Nietzsche*, W.Kohlhammer verlag Stuttgart, 1958. (レーヴィット『ヘーゲルからニーチェへ I・II』, 柴田治三郎訳, 岩波書店, 1952, 1953.)

Reginster, Bernard, *The Affirmation of Life: Nietzsche on Overcoming Nihilism*, Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, and London, England, 2006.

天野正治編『現代に生きる教育思想5 ドイツ(II)』, ぎょうせい, 1982.

岩波哲男『ニヒリズム——その概念と歴史——上、下』, 理想社, 2005, 2006.

佐藤学『「学び」から逃走する子どもたち』, 岩波書店, 2000.

ツルゲーネフ『ロシア文学全集第3巻 ツルゲーネフ』, 米川正夫訳, 修道社, 1956.

内藤可夫『ニーチェ思想の根柢』, 晃洋書房, 1999.

八木誠一『イエスとニヒリズム』, 青土社, 1979.

矢島羊吉『ニヒリズムの論理 ニーチェの哲学』, 福村出版, 1975.

(3) 論文

Ramaekers, Stefan, *Teaching to Lie and Obey: Nietzsche on Education*, in: *Journal of Philosophy of Education*, Vol.35, No.2, 2001.

相澤伸幸『『ツァラトゥストラ』にみるニーチェの自己形成思想』(『教育哲学研究』78号, 教育哲学会, 1998.)

宮澤知江美「ニーチェにおける言語と自己形成の問題」(『教育哲学研究』67号, 教育哲学会, 1993.)

Nihilism and Human Formation in Nietzsche

Masaki ONOZUKA

(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

Nietzsche's nihilism can be regarded as a problem of human formation especially in the psychological condition. This is treated as the problem of living in an age of nihilism. Even if nothingness recurs eternally in the most extreme form of nihilism, we must take it actively as the highest formula of affirmation that can possibly be attained. Nietzsche's thought of human formation, stating that man is formed in self by overcoming himself and creating new value, originates from his thought of nihilism. Nietzsche, who established the idea of human formation, which states the survival of life by affirming value nihilism and by continuing to create new value, gifted us with this realistic and practical thought in our real life.

Keywords : Nietzsche, nihilism, human formation, self-overcoming, creating new value